

Title	中支遊記
Sub Title	
Author	松本, 芳夫(Matsumoto, Yoshio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1939
Jtitle	史学 Vol.18, No.1 (1939. 9) ,p.145- 163
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19390900-0145">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19390900-0145</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 中支遊記

松本芳夫

## 昭和十三年十二月三十日

急に話がもちあがり、急に決定したこの旅行は、まことにあはたゞしい準備にはじまつたが、いよいよ今夜八時半の急行列車で東京驛をたつ。プラットフォームのにぎやかな興奮のうちに、同行者の柴田、松本(信)、北村の三氏はそれぞれ家族や知人達にとりまかれて挨拶をかはしてゐるのに、

どうしたのか間崎氏がなかなかやつてこない。萬事まつさきにたつ同氏がおくれるのは不思議だとおもつてゐると、發車間際になつてあたふたとかけつけてきた。應召兵のやうに萬歳の聲におくられて、うごきだした列車の窓からしばらく手をふつてゐたが、まもなく座席におちつくと、車内に査問會がひらかれて間崎氏の遅刻についての訊問がはじまり、ふだんの同氏にあはしからぬことにて、同行者に氣をもませたかどにより罰金刑の判決があり、混雜する食堂車で茶菓の饗にあづかつた。

## 十二月三十一日

寝臺車でない普通客車のこと故、昨夜はあまりねむれなかつたとみえて、『君はよくねむつたやうだ』、『いや、君の方がよくねむつた』などと、おたがひに相手を呑氣者にしてゐるうちに、汽車はすでに阪神間に入り、今夏の洪水の慘害などに

ついて話してゐると、まもなく午前七時四十三分三宮驛についた。三井物産神戸支店の武内氏にむかへられ、オリエンタル・ホテルで朝食を喫し、

税關について寫眞機携帶伴出の證明書をもらひうけ、九時すぎ太洋丸に乗船した。埠頭においてはからずも西岡君及びその婚約者齋藤糸子嬢にでくはしたのは全く意外なことであつた。たちならんに多數の見送人のうちに、如何にもたのしくうれしさうによりそつて、手をふつてゐるこの二人の若者をみてみると、こちらは見送られる身でありますながら、かへつて彼等の多幸をいのらざるをえない。いよいよ午前十時解纜。空はあくまで晴れ、

六甲の山々は冬空にうつくしくかがやいてゐる。静かにうつりかかる瀬戸内海の景色は、いつもながらきれいだ。この航路は門司を素通りで、玄海灘にでるらしい。本年もいよいよのんきな旅行のうちにくれてゆく。夜十一時四十五分まさに寝床

にいらうとすると、喫煙室から外人達の合唱する歌がきこえてきた。

### 昭和十四年一月一日

昨夜就寝前船室の入口にだしておいた靴のうち同室者の柴田氏のものだけあつて、松本氏と自分の靴はみあたらない。給仕をよんできいたが全くしらぬのこと、これはけしからぬと憤慨したことろ、多分それは外人達の惡戯だらうとのことで、給仕は早速船内をさがしてもつてきてくれた。被害者は吾々ばかりではなく、數人の靴をもつていつて片方づゝあちこちにおいてゐたとのことだ。

午前八時甲板において乗客船員の遙拜式があつた。元旦のこと故、朝食は清美汁、御祝肴、御口取、御煮物、膾、御作身、御雜煮餅、小つみ數ノ子などと言つたもの。戰時の船中とはいへ、平和に新年をことほぐことのできるわれら日本人は

まことに有難いきはみである。船は濟州島を右舷にみながら北進しつゝある。午後喫煙室で間崎氏と碁をうつてゐると、そばでみてゐた乗客の一人が、自分をかもとみたか挑戦してきた。段位をさくと五級とのこと。好敵ござんなれとたゞちに應戦、まづ自分は黒をもつて對戦したが中押勝、ついで白をもつても美事に連勝、かつべき仕合には、

ちやんと勝つとおほいに氣焰をあぐ。船中における日本人の娛樂は主として碁、将碁、麻雀のやうなしづかなものであるが、外人はダンスをやつたり、うたつたり、はては日本の愛國行進曲や流行歌まで上手にうたひこなすといふ、なかなか陽氣なもので、船中の生活においても彼我の性格の差異がいちぢるしくあらはれてゐるのがおもしろい。夜食堂で映畫があつたが、ひとり部屋にこもつて、内藤湖南博士の支那繪畫史をよむ。

一月二日

中支遊記（松本）

朝すでに左舷に舟山列島らしいのがみえた。本日上海着の豫定であつたが、潮の關係とかで、今夜は吳淞沖に假泊することになつた。揚子江に入つたといつても、茫洋たる黃濁の海である。どこが海やら河やらわからぬ、とらへどころのないのが支那の本體らしい。

一月三日

午前六時吳淞沖を發し、敵前上陸の苦戦などをしのびつゝ雨の黃浦江をさかのぼる。目にいる大小の船のほとんど大部分が日章旗をひるがへして、たがひに手をあげ歓呼をかはして挨拶しあふのは、全くこゝろづよくうれしいかぎりである。十時頃日本領事館警察署前の埠頭につき、三井洋行の酒井氏をはじめ、平山氏、蘆田氏、高塚氏夫妻にむかへられて上陸した。都合によつて柴田、間崎兩氏と自分とは新生旅館に、松本、北村兩氏は萬歲館別館に分宿することになつた。さうして萬

歲館別館において上海自然科學研究所員尾崎金右衛門氏と會見。午後三時半柴田氏の案内にて間崎氏とともに旋高塔路、恒豐里の旅館を出で市中見物にでかけた。昨夏にくらべて支那人の來住せるものもはなはだ多く、めざましい復興を示してゐることなどを柴田氏からきかされつゝ、北四川路を南下し、蘇州河をわたつて舊英租界の南京路にいたり、ガーデン・ブリヂをわたつて歸途についたが、いくらあるいても北四川路にはでない。『これでいいのですか』と問うと、『これでいいのだ』

といふ柴田氏の案内ぶりに信頼していつたが、人通りが淋しくなるばかりでなく、町の状態がだんだん陰惨の色をおびてきて、すこし變だとおもつてゐると、はたして全くの廢墟と化した戰跡にきてしまつた。燒野原のなかに、こちらの方には酒屋であつたのか壺が澤山ころがつてゐたり、あちらでは自轉車の軸が幾體も埋つてゐる。しかしあたりがもはや暗くなり、雨もふりだしたので、いたづらに低回してゐるわけにゆかず、地圖をだしてうすらあかりにやつと歐嘉路を見出し、しばらくあるいてクリークの橋の詰にたつてゐる陸戰隊の歩哨に道をたづね、七時前宿にたどりつくことができた。柴田氏のあやしい案内ぶりのために路に迷ひ、しかしそのためにはからずも戰跡見物をなすことをえ、まるで塞翁が馬の譬のやうな半日であつた。

## 一月四日

午前自動車で佛租界の上海自然科學研究所をおとづれ、ひきかへして舊英租界の三井洋行を訪問、支店長塙氏から午餐の饗應にあづかり、午後領事館警察署を訪問。夜蘆澤氏に案内され映畫見物にでかけた。南京路をあるいてゆくと、雜踏のなかから『もしもし』と日本語で話しかけ、おもしろいところへ案内しませうと如何にもなれなれしさ

うに一人の支那人が寄ってきた。事變前數年間大坂で洋服屋をしてゐたとのことで、日本語がなかなか達者である。いつもこのへんにゐますから御用の時にはよんでもくださいといつて何處かへきていた。時間があるので永安公司樓上の天韵樓にのぼる。こゝは百貨店の上層部で、曲藝や演劇などが開演されてゐる遊樂場であつて、大變な雜踏だ。帽子や寫眞機をとられないやうにとの注意に用心してゆくと、『をぢさん、をぢさん』といふ嬌聲がうしろからきこえ、何氣なしにふりかへると、これはなんと、若い姑娘が五六人も後にくつついてゐるではないか。氣がつくと、いつのまにか一行はこれら娘子軍に包囲されてゐた。やうやくにしてこの攻圍陣を脱し、九時からメトロポール（上海大戲院）においてゲイリー・クーパー（賈萊古柏）主演の『マルコ・ポーロの冒險』（麥高包祿）をみた。映畫はつまらぬものであつたが、開

演前から觀覽席の中央に陣取つてゐた我等一行に對して、周圍の支那人は、たいして關心を有しないもののごとく、いたつて平靜であり、べつに敵意を示すやうな身振りもみなければ、反感や憎惡にみちた視線にでくはすこととなかつた。南京路の散歩においても、天韵樓の混雜においても、さういふ經驗の一度もなかつたのは、むしろ意外とするところで、これは支那人の態度がなごやかになつたためであるのか、それともわれわれの神經が鈍感であつたためであるのか、或はさういふ尖銳化した支那人にでくはさなかつたといふ偶然のことにすぎないのかわからぬけれども、自分にとつてはこゝろよい印象の一であつた。由來支那においては骨董品の偽作が多く、偽物として買つてくればまちがひがないとさへいはれており、したがつて支那人は眞偽の判別力がいたつて鋭敏であるといはれるが、これは人間に對してもおなじ

であつて、ほんとうの人間といんちき野郎との區別は、支那人においては鋭敏であるから、おそらくわれわれをもつて、信頼しうるほんとうの日本人と見たのであらうと自負しておかう。

## 一月五日

舊英租界のパレス・ホテルにて午食をなした後、博物院路にある博物院を見學。殷墟出土品に見るべきもの若干あり。それより高塚氏に案内せられ間崎、北村兩氏とともに市政府及び、戰跡見物にでかけた。ところが、その途中自動車がパンクしてしまひ、それがため運轉手は他の自動車に便乗してあたらしいタイヤをとりにいつた間、われわれは寒風ふきすき路上におきざりにされてしまつた。周圍みると、砲弾のために破壊された白壁の家が、ところどころに點在してゐるだけで、茫茫たる野原である。こゝに蔣政權があたらしい上海を建設しようとしたのであつて、その規模もは

なはだ大きく、その意氣や壯とすべきであつた。しかし都市の發達は單に政治的條件のみでなく、むしろ經濟的、地理的條件によるところが多いのであつて、現在の上海の中心點の發達も、黃浦口の屈折點と蘇州河との交流點に位してゐる地理的條件がおほいに作用してゐることをみると、たゞ大きな街路を開設し、莊麗な官衙を諸所に散在せしめただけで、はたして現在の中心點の勢力を奪ふやうな繁榮をみることができるとかどうか、おほいに考慮を要する問題だと、柄にもないことをかんがへてゐると、約四十分にして運轉手はあたらしいタイヤをもつてかへつてきた。市政府はすつかり修繕がなり、くまなく案内してみせてくれた。夜高塚氏宅にまねかれ、同郷の巽氏もきて歡談。

## 一月六日

長崎縣上海といはれるやうに、上海には殊に旅館の經營者や女中などには長崎縣人がはなはだ多

い。ところが吾々旅人にとつて不満であるのは、これらの接客業者がいかにものんきで漫々的であることである。支那においては萬事悠然と大陸風にかまへねばならぬところがけてゐるもの、時にははらだらしいこともないではない。南京行のため今早朝出發の旨を昨夜とくとつげておいたにかゝはらず、われわれが午前六時に起床して出發の用意をとゝのへ、みづから荷物を階下にはこんであるのに、なほ食事の仕度もできぬ有様で、やつと八時北停車場にかけつけたところ、すでに

、三十分間も車内からだしてもらへず、やつと解放されたが、洗淨、含嗽、噴霧などの種々の消毒をやらされ、或る女の外人が消毒をきらつて兵士にどなりつけられたのは、笑止でもあり、きのどくでもあつた。驛には中支圖書標本整理事務所の保坂君をはじめ其他の人々がでむかへてくれ、柴田、間崎兩氏は日本旅館寶來館に、松本、北村兩氏と自分とは鶴鳴寺路の整理事務所に分宿することになつた。

### 一月七日

驛前には何百人といふ多數の旅客が切符を買ふために長く堵列してゐた。午前九時半發車。客車は内地の鋼鐵車で、二等車も内外人で満員だ。ひろい江蘇の平原、運河、クリーク、塔、墳墓などがねむい目にぼんやり去來するうち、午後四時頃南京の下關驛についた。しかし車内に天然痘患者が發生したとかにて、プラットフォームについてま

らにかつて塾の配屬將校であつた丸山少將を軍司令部にたゞねたが漢口行にて不在。また幼稚舎教員久保田氏が入院中ときき、兵站病院に慰問したところ、すでに後送せられて會見できなかつたが、塾員の間塚直次主計中尉をはじめとし、軍醫の伊藤正保、星田昌文、佐多久一の諸氏と快談してわかれた。

## 一月八日

今日も天氣よし。午前整理事務所内の地質部を見學。こゝにおびたゞしいヨーロッパの舊石器や

殷墟出土の土器など所藏せられてゐるのは奇異と

## 一月九日

いふべく、これは當然他の部において研究せらるべきものである。昨日この構内で、所員が整理してすてた礦物の屑のうちから舊石器一個を發見したが、専門外の目には價值のない單なる一小石片位にしかうつらないのであらう。ついで構内における支那軍施設の防空坑道を二つばかりみて、

その整備に感心し、更に隣地にあたる鷄鳴寺をおとづれた。この寺は南京城北の玄武湖にそつた鷄籠山といふ丘陵にあり、城壁をへだてて紫金山をのぞみ、或は南京市街を俯瞰して非常に眺望のいいところである。午後は南京特務機關と小關兵站司令部とを訪問。それより新街巷から莫愁路にいたる泥棒市場をひやかしてゐたところ、商工學校出身の東塙慎一郎少尉に邂逅したのは、全くおもひもよらぬことであり、なつかしいことであつた。

整理事務所の標本部のうち、保坂氏整理中の考古學標本、松本氏擔當の民族學標本、其他鳥類の標本などを見學。寶來館に一室あいたといふので、夕方北村氏とともに轉宿した。すると塾員吉武太郎中尉が同宿してをり、明後日飛行機にて漢口にかかる故是非一緒にゆかうとすすめられ、もし軍

の許可がえられれば同行することにした。

## 一月十日

飛行機便乗の許可をうべく吉武中尉とともに軍司令部にいつたところ、はからずもまた塾員桐山勝治中尉に邂逅した。ついで軍特務部、總領事館を訪問。しかるに總領事館において故宮博物院南京保存庫の開扉の實現なきことをしらされ、われわれの渡支の目的の一であつた同所の見學を斷念せざるをえなくなつたのは殘念である。一體この問題は昨夏第一回調査團の渡支の時にはじまるのであつて、當時柴田、松本兩氏から軍司令部に対して保存庫の開扉を慇懃し、軍司令部においてもその際の立合、整理のことを兩氏に托されたのであるが、柴田氏は北支調査に、松本氏は杭州調査にむかひ、時日の都合上實現できなかつた。けれども、其後松本氏は他日開扉の場合同所藏品の研究利用許可について軍特務部の諒解をえて歸國し

たのであつた。しかるに昨年十二月二十二日の東京朝日新聞紙は突如としてこの保存庫の開扉されたことを報じ、かつ近く正式開扉の行はれることがしられたので、昨夏以來のゆきがかりがあるため、柴田、松本兩氏がその開扉に是非立合ふことを切望し、特に松本氏には中支圖書標本整理事務所福岡氏より立合ひをうながしてきたので、われわれもまたその一助たらんことを期して、急遽旅裝をととのへてやつてきたのである。しかるに海上陸後われわれの接した關係者一部の態度ははなはだおもしろからざるもので、われわれ一同の全く意外とするところであつた。つひに今日にいたつて断念せざるをえなくなつたのは、やむをえないとはいひながら、まことにゐかんことである。われわれはいたづらに辯解や愚痴をのべないであらう。たゞわれわれが對支文化工作にみづからすゝんで協力しようとした努力が無下にしりぞ

けられたことをかなしみ、かつわれわれの眞意を了解できなかつた人々の猜疑偏狹をあはれむのみである。總親和、總協力はかういふところから實現されねばならないので、日支融和の前にまづ日々融和の必要がとなへられる所以となるほどと感せられた。

午後柴田、間崎二氏とともに宿のちかくにある娘々廟と古二郎廟とを見た。さうして前者で『湖南旅京同鄉定湘王行宮志略』を一部づゝもらつたが、それによるとこの廟は清の定湘王（韓公）をまつた南京の城隍廟であるらしい。

## 一月十一日

今日も天氣よく暖し。午前柴田、間崎、北村三氏とともに、大鐘亭、及び鼓樓を見學。午後北村氏とともに松本氏の案内にてドライヴした。中山門外東方の一帯は紫金山の裾で、こゝに中山陵、明孝陵などがあり、土地に起伏があつてうるはし

い自然公園をなしてゐる。中山陵、靈谷寺について、明孝陵をみた。中山陵は紫金山の中腹にまで階段をなし、今は中段の樓門を閉鎖して、それより上へはいれさせないが、白色の建物と碧色の瓦とをもつて如何にもあかるい近代色ゆたかな構圖である。これに反し明孝陵は墳丘がやはり紫金山の中腹にあるらしいが、陵域は平坦をなしてをり、現在は、さびれはてた一の史蹟にすぎないけれども、全體の規模も前者に比して大きいやうだし、その構圖も厚みと深みの感じにおいてははるかに前者をしのぎ、帝陵としての壯大な面影がしのばれる。それより紫金山の天文臺にのぼつた。渾儀と簡儀とが二臺、木柵の中におかれてゐるのみで、天文臺そのものは廢墟にひとしいものであるけれども、南京市街や城外の玄武湖、はるかに遠く揚子江までみはるかされて眺望はまことにいい。下山してながめる南京城壁は逆光線のためにまくろ

くつらなり、城壁都市の偉大な姿をはじめてつよく感することができた。ついで光華門から中華門、さらに城外の雨花臺の戦跡をおとづれて、南京攻略の激戦と皇軍のかゞやかしい戦功とをしおび、歸途は支那街を散歩した。

漢口行の飛行機便乗がだめになつたのは殘念である。

### 一月十二日

南京特務機關の川田氏、通譯釋氏の案内にて、柴田、間崎、北村諸氏とともに、午前十一時中華門外雨花臺附近の普德禪寺をおとづれた。支那の寺をしたしく見學するのははじめてであつて、本尊の安置された背後に觀音の補陀落山圖をあらはした塑壁があることや、鐘樓がなくて鐘が堂の隅に櫓をくんでつるされたり、或は梁からつるされたりしてをり、その鐘の下部の周邊が波状をなしてゐるものと、日本風の平らかなものとの二様ある

ことなどいろいろ興味ある事實を知つた。しかし、日本の寺に比して一體に荒廢がはなはだしいやうで、殊にかつての戰争には支那兵がこもつてゐたらしく、中庭の隅などにはいろんなものがちらかつてをり、寺の背後の丘の裾には鐵兜がいくつとなく散亂してゐる。住持の學愚氏がしたしく案内して午食には精進料理や菓子などをだして款待してくれた。ついでこゝからひきかへして中華門外の街路に面した大報恩寺をおとづれた。今は全くの廢寺となり、安德門區公所や初級小學校舍となつてゐる。しかるに柴田氏の後についてこの寺の背後の、民家のたちこんだ、じめじめした陋巷にはいりこんでゆくと、大部分土にうもれてゐるが、弓狀をなした石橋の遺跡や、或は礎石が發見され、その礎石の一が現在民家の井戸の枠に利用されてゐるのは殊に興味があつた。更に安德門區々長、尉遲琨氏の案内にてこゝから數町はなれたところ

にゆくと、直徑二間もありさうな鐵製の半圓形で、周圍に蓮華をあらはしたもの、その下部を土中に没したまゝ椀のやうにふきつてゐる。異様なものだが、おそらく報恩寺の塔の露盤であつたらうとのことで、これらによつてこの寺のかつての壯大な規模が想像せられるのである。これより明故宮をおとづれた。草茫々の遺跡を調査してゐるわれわれ一行をあやしんで、かけつけてきた三名の警備兵が銃から填充してゐた弾丸をぬきだしたのにはいささかおどろかされたが、おかげでその附近にすててあつた明故宮の大瓦をもらひうけ、六時宿にかへつた。

## 一月十三日

昨日とおなじく川田氏、及び釋氏の案内で、あらたに金城病院長岸氏と小泉嬢とが一行にくははり、午前十一時四十分南京驛發、棲霞寺にむかつた。棲霞山驛についたところ、プラットフォーム

で兵隊さんと戯れてゐる犬は、中型日本犬と全くおなじであり、その後この附近の犬を注意したところ、同型の犬が多數ゐることにきがついた。驛から五名の警備兵に護衛されて、一時半頃棲霞寺についた。寺の背後の山のかなたに共匪があり、昨夜から討伐中であるといふ。寺僧の大本、覺民諸氏は釋氏の友人で途中までむかへてくれた。有名な六角塔や岩窟内の石佛など六朝時代の作であるとか、或は唐代、さらにくだつて宋代のものであるなどといはれるが、自分にはほんとうのことはわからぬ。たゞ石佛のごとき後世の加工で原型がぬりつぶされてゐるもののは遺憾のきはみである。背後の山にのぼり、警備の兵隊さんと枯草のうへに横になつて日向ぼっこをしながらしたしく話をする。慰問品をもらふのがこのうへなくうれしいこと、たゞし身のまはりのものより、読みもの、食べものなどを希望すること、ま

た慰問文もしかつめらしいことは兵隊さんの方で  
萬々承知してゐるから、さういふかたくるしい  
ことよりも、むしろ緊張の氣分をほぐしてくれる  
やうな文面を欲することなど、銃後の國民として  
われわれがこゝろがけねばならぬことをきかさ  
れた。寺では是非宿泊するやうにとすゝめてくれ  
たけれども、明日のこともあり、午後六時すぎ下  
山、六時四十四分棲霞山驛發の汽車で南京にかへ  
つた。

### 一月十四日

昨夜の相談の結果十七日南京發、十九日上海發  
の汽船でかへることになつたので、午前柴田氏と  
ともに、三井洋行について船室豫約申込のこと其  
崎、北村三氏以外、岸氏、小泉嬢も同行。北村氏  
が石人石獸を一一撮影してゐる間に、われわれは  
その附近をあるきまはつて、叢のかげで髑髏をひ

らつたり、小丘のトーチカをのぞいたりした。そ  
れより市内第一公園内の飛來泉を見、夕方五時一  
旦歸宿した後、柴田、間崎二氏とともに朝天宮を  
おとづれ、がらんとしたその構内を一巡し、さ  
らに黃昏の雜踏する水西門を通つて莫愁湖にでか  
けたが、冬枯の湖畔はたゞ蕭々たるものであつ  
た。

### 一月十五日

午前八時四十分南京驛發にてふたたび棲霞山驛  
にゆく。同行者柴田、間崎、北村、岸の四氏と小  
泉嬢。通譯の釋氏が一昨夜來棲霞寺に滯在してゐ  
るので、間崎氏とともに同氏よびだしに寺をおと  
づれたところ、寺僧も二名同行をのぞんでついて  
きた。途中をかしながらに、兵隊さんの姿をみて、  
水をくんでゐた姑娘が、あたふたと民家のなかに  
にげこんでしまつた。これをみて兵隊さんは苦笑  
してゐる。男子は出會ふとかならず頭をさげて挨

拶をするが、女子は決してしないとのこと。これはどういふ理由かわからぬ。たゞ姑娘達がわけもなく兵隊さんをおそれることに對して、兵隊さんは心外でたまらぬらしい。嚴肅なわが兵隊さんを信頼しない姑娘の猜疑と無智とは、またあはれむべく、かなしむべきものであるとともに、たがひに親しめない心の寂寥は、兵隊さんにとってつらいにちがひない。

一旦驛にひきかへし、それより三名の警備兵にまもられ、鐵道線路にそうてゆく。ふいに足もとの叢から雉子がとびたつたり、一行をあやしんで他の鐵道警備兵がかけつけてきたりするうちに、堯化門驛のちかくまですすみ、それより田圃を逆行して順次に所謂六朝墓を見学した。最初みたのは梁吳平忠侯蕭景墓で、石獸一基と石柱(神道碑)一基、いづれもその下部は烟の土中に埋没してゐる。石獸は所謂天祿辟邪で、諸説あるらしいが、

朱偰によると、獨角は麒麟、雙角は天祿、無角は辟邪で、この有翼石獸はアッシリヤ式、石柱はギリシャ風のものであり、さらに六朝陵墓の特長として、(一)多く大道の傍とか低濕の地にあつて、山に依つて墳をきづく後世のものとは全く異つてゐること、(二)多く一處にあつまつて、おのづから組をなしてゐること、(三)帝陵の前面には皆一雙の麒麟がならびたつに反し、諸王墓は麒麟をもちゐえないので、前面には辟邪がたつてゐること、(四)その墓制をみると、前面に石獸が左右に對立し、その後方に墓闕(石柱)があり、その後に碑碣がたつこと、たゞ梁安成康王蕭秀墓だけ四碑があつたので、すなはち前方に石獸一雙、そのまま後方に二碑が東西に相むかひ(現存せず)、さらにその後方に墓闕一對、最後にまた碑一對があつたこと、(五)陵墓の大きさはまゝ史籍に記載があつて、建康實錄の所載によれば、晉穆帝永平陵は周圍四

十步、高一丈六尺、宋武帝初寧陵は周圍三十五

歩、高一丈四尺、宋文帝長寧陵は周圍三十五步、

も

ない。

高一丈八尺、陳武帝萬安陵は周圍六十步、高二丈、陳文帝永寧陵は周圍四十五步、高一丈九尺あつて小さいものではなく、諸王墓のうちでは蕭宏、蕭正立の墓が最大であることなどをあげてゐる（建康蘭陵六朝陵墓圖考）。われわれが今日みた石獸は梁安成康王蕭秀墓のもののみ全身を示して

あるのみで、其他はすべて脚部を土中に没してをり、そのうちにはほとんど毀損してたゞ痕迹を示すもの、頭部を缺けるもの、後部のなきもの、或は全身にわたつて磨滅のはなはだしいものなどいろいろあつたが、それらはほとんど辟邪であつて、麒麟でなかつたやうだ。しかし頭をもたげ、舌をだし、肘をはれる姿は、焰を吐いてまさにとびかゝらんする勢を示し、實に雄渾の氣魄にあふれたもので、明孝陵の石獸のごとき、くらべべく

この附近の民家のうちには切妻作の藁屋根で、幾棟もつぎたして、あたかもわが古代の埴輪家の恰好をおもはせるものがある。天氣よくあたたかで、あるくと汗ばむので終に外套をぬいだが、往復五里ばかりを走るいたためいささか疲れた。ふたたび棲霞山驛にもどり、夕方南京に歸着した。

### 一月十六日

南京滯在中はほとんど毎日天氣よく、あたたかで、まことに好都合であつたが、今日はひさしぶりにて雨。荷物の整理をなし、夜柴田氏が他に招待されたので間崎、松本、保坂、北村四氏と南京料理の太平洋において會食した。南京も今日はよいよ最後の日だ。この南京は單に戦禍をかうむつてゐるといふばかりでなく、古い都城でありながら、近代化の未完成のためにすこしもおちつきがない。將來どういふおちつき方をするか興味あ

る問題の一つである。

### 一月十七日

午前八時二十五分いよいよ南京發。一行は、間

崎、松本、北村の三氏と中支圖書標本整理事務所の保坂、毛利の二氏。柴田氏は荷物の都合で一日おくれることになつた。午後五時頃上海着、萬歳館別館に投宿。間崎氏とともに日本郵船會社支店にゆき、かねて申込んではた豫約を變更して廿三日發とすることにした。間崎氏は柴田氏とともに十九日出帆歸朝のはずだが、自分は明日松本氏一行とともに杭州の見學にでかけるためである。旅館にかへる途中、ちよつとわかりかねたので、街上の支那巡警に旅館のありかをたづねたが、日本語を解しないために一向要領をえず、ふと前方をみると、すぐむかふ側に當の旅館があるではないか。自分も苦笑するし、そばでみてゐた日本人もわらつてゐたが、しかし上海の巡警が日本語を解

するほどにならなければ、まだまだ日本はゐられないとおもふ。

### 一月十八日

午前九時十分北停車場發。二等は滿員で、やむなく三等にのる。松本氏一行は軍囑托のため客車は別で、自分ひとりになつたが、三等も超滿員であり、客車の入口の車掌詰所らしいところにやつと一人分の席をとることができけれども、周圍は全部支那人で、荷物をたくさんもちこんで身うごきもならぬほどだ。嘉善あたりから降車するものもあり、いくらか樂になつた。嘉興で蜜柑を買ひ、たべのこりの一つを隣席のお爺さんにあたへたところ、よろこんでうけとつたので、自分もうれしかつた。蜜柑一つをうけとる、うけとらないなどのことを問題とすること自體が第三者からみてをかしたことであるかもしだれぬが、もしこの場合お爺さんがよろこんでうけとらなかつたならば、

自分はおそらく大衆における抗日意識の強烈のせいにしたであらう。支那の大衆は昔から上層部とは全く異つた別の生活をなしてきて、今日においても兩者のへだたりがあまりにひどく、大衆の知性のたかまれる日本とはこの點非常にちがつてゐるから、支那人に對する態度や政策もこの事實を考慮してかゝらねばならぬとおもふ。現在の知識

階級を無視するわけにゆかぬであらうが、しかし彼等は、多少の程度において尊大な中華思想にねぎした民族精神をいたいでゐるのであるから、彼等を心服せしむることはおそらく不可能であらうし、また外交術にたけた彼等の言動の表裏をみぬくことも、正直すぎる日本人にはむつかしいことであらうから、長期建設のたてまへからいつても、むしろ大衆の徹底親日教育がのぞましい。それに大衆がおたがひになごやかな氣分になつてしまふことが必要であらうが、なにしろ支那語はなじむこと

につわからぬ自分は殘念ながらはなしかけることもできず、蜜柑一つをあたへてこちらの氣持をつたへたにすぎない。二時三十五分杭州着。松本氏一行とともに、新々旅館に投宿。西湖々畔にのぞみ、眺望きはめてよし。松本氏と外出して街を散歩した。

### 一月十九日

午前九時半松本氏一行とともに特務機關の閑林氏の案内にて西湖博物館にゆき、昨夏松本氏が整理された有孔石斧や、黒色土器其他を見學した。

午後毛利氏とともに中山公園、鳳林寺、岳王廟を見物、ついで蘇堤をあるいて西湖の南岸にいで、淨慈寺をおとづれた。難民の救濟所となつてゐて自分達にぞろぞろついてきた子供のうちに愛國行進曲をうたつてゐるものがあつた。黃包子にのつて湖畔をかへつてくると、三人づれの姑娘が自分達を見てつと笑つたが、そのうちの一人のごと

きは、まるで日本人そつくりの容貌をしてゐる。南京においてもさうであつたが、中支の支那人には日本人顔のものがなかなか多い。四時頃宿にかかる。

### 一月二十日

部屋が西湖に面してゐるために、昨朝も今朝も寝臺のうへからうつくしい日の出を見ることができた。午前十時半毛利氏とともに黃包子にてまづ清蓮寺をおとづれ、有名な玉泉の觀魚をなし、ついで雲林寺（靈隱寺）にゆく。物賣りや案内の子供達が數人さきをあらそつてやつてきて通天洞につれてゆく。雲林寺の建物は近年の改築で全くあたらしい。寺の西方から石段數百級をのぼつてゆくと韜光菴があり、はるかに西湖をのぞんで眺望がいい。雲林寺からさらに南にをれて下天竺、中

かむつてゐる毛利氏に對して巡警が舉手の禮をする滑稽などが印象にのくるのみであつた。午後下山して西湖に舟遊をこゝろみ、湖中の記念塔、湖心亭、小瀛洲、三潭印月などをみた。風もなく、のどかな湖面には漣もたらない。しかしどこかうらさびしい靜けさである。舟をあがつて博物館に松本氏等をおとづれたが、すでにひきあげてゐたので、町にいで、骨董屋をひやかした。

### 一月二十一日

午前九時十分發の汽車で杭州にわかれをつげ、たゞひとり上海にもどつた。汽車はきはめて樂であつたが、先日來風邪氣味で、それに疲勞がくははつて身體だらく、頭おもく、下痢がするのでたゞちに臥床休養した。

### 一月二十二日

午前高塚氏に案内せられ、廣東路、南京路を散歩し、午後宿にかへると松本氏一行も杭州からか

へつてゐた。夜工部局副總監で塾員たる上原氏が

ぞまれたいことである。海上いたつて平穩なれ

招待してくれたけれども、自分は病氣辭退、松本

ど、午後は船室にこもり臥床休養した。

保坂二氏が出席した。北村氏も氣分わるく、とも

にはやく臥床した。

### 一月二十三日

蘆澤、保坂兩氏にみおくれ、松本氏とともに  
午前十時（上海時間九時）上海丸にていよいよ上  
海にわかれをつげた。今度の旅行は、その目的の  
一つをはたしえなかつたのが遺憾であるけれど  
も、しかし中支の史蹟調査、考古學的研究におい  
てうるところは鮮少でなかつたとおもふ。ことに  
自分は上海をのぞいていづれもはじめての土地で  
あるだけ興味もふかかつた。たゞわれわれの希望  
するところは、對支文化工作にあたつて、學問の  
研究に繩張をまうけたりしないこと、わが國民性  
の缺點ともいふべきおたがひに對する猜疑偏狹を  
すててあくまで明朗にして豁達な精神をもつての